外国人として生きる

人権活動家として、格闘家として

庄司 博史（しょうじ ひろし）
本館民族社会研究部

難民から人権活動家へ

難民としてホスト国に受け入れられた人にも、さまざまな生き方がある。極端な例を挙げてみる。ひとつはホスト国の文化やしきたり、ことばなどを完全に自分のものとして受け入れ、早くその多数派の人びとと同じようになろうとする立場である。第二は、これとは逆に同化をこばみ、自分の文化や慣習、宗教を維持しようとする立場で、場合によっては社会との接触まで拒否してしまう。多くの場合、これらふたつのどこか中間に落ち着くのが通常だが、いずれの場合も本人の何かを守ろうとする信念に基づくもので、安易な評価の対象ではない。さらに、三つ目の生き方がある。これは、前述のふたつとはことなり、ホスト社会に対して積極的に働きかけ、変えていこうとする立場である。

誰の目にも、この最後のタイプにしか見えないハメッド・シャファエさんにわたしが会ったのはもう六年も前、ヘルシンキの多文化センター・カイサだった。行政の移民事業を調査するため何度か足を運んでいるうちに、当時カイサの文化担当職員として働いていたハメッドさんと親しくなった。アフガン難民第一号として、一九九三年二三歳でフィンランドにやってきていた彼は、二〇〇一年にはすでにフィンランドでいくつもの「顔」をもっていた。

カイサは、ヘルシンキ市の運営する多文化センターのひとつで、外国人の文化活動や市民との交流の場として、一九九五年に設立されている。カイサの職員には外国人が多く登用され、それぞれの言語能力や特技を生かして外国人の文化活動を支援し、また企画運営もしている。ハメッドさんはそのカイサで、移民コミュニティや相互の交流を促進する活動を担当していたが、それを超えた移民文化交流の裏方として奔走する彼を知らない人はいなかった。要するに気さくで世話好きなのだ。

一方、彼はまたアフガン人難民組織の代表者でもある。一九八〇年代末、当時の親ソ政権との対立が、ハメッドさんの五年にもおよぶイランでの難民生活の契機となった。一方、現在二〇〇〇人近いアフガン難民の大部分は、二〇〇〇年以降、タリバーンの圧政を逃れてやってきた人びとである。なかには彼の出身民族であるハザラ人のほか本国で圧倒的多数派を占めるパシュトーン人もいて、本国での民族的摩擦にまつわる対立感情もなくはない。そのような多様な人びとをまとめ、コミュニティとしてのネットワークを維持するほか、言語や文化を擁護するための活動を組織するのも重要な役割であると思っている。

ハメッドさんはアフガン難民のためだけに活動しているわけではない。フィンランドに受け入れられるまでパキスタン、ロシアなどで、難民生活を経験し、また基本的人権さえ保障されない身分を味わってきた彼は今、フィンランドで人権活動家としても知られるようになった。EUの支援を受ける「ヨーロッパ反差別ネットワーク」フィンランド支部の二〇〇三年設立以来の副代表でもある。二〇〇四年、ヘルシンキで開催された開発援助に関する討論会では、国家元首として人権意識の高いことで知られるT・ハロネン大統領と対等に渡り合ったことが報じられ、一躍名が知られるようになった。彼の今の夢は、フィンランドの開発援助をアフガニスタンの故郷バーミヤンの学校教育に向けさせることだという。

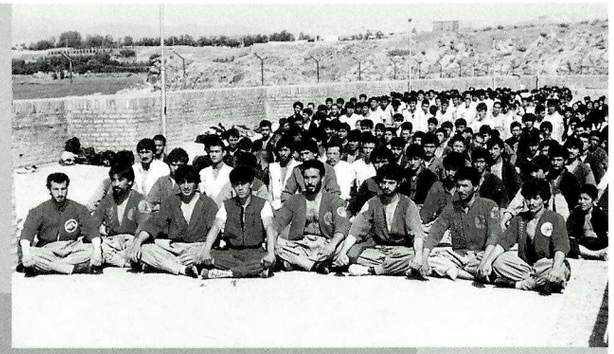
武術協会を設立

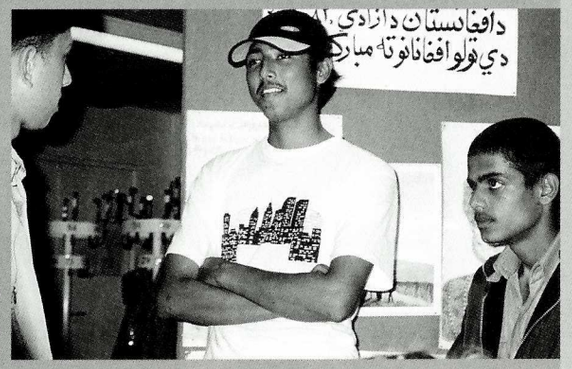
とはいえ、こんな人権活動家のハメッドさんは、もうひとつ重要な顔をもっている。格闘家ハメッド・シャファエとしての顔である。アフガン時代からあらゆる東洋的格闘技に魅せられ、難民生活のなかでも腕を磨いてきたという。そしてフィンランドに難民として受け入れられたハメッドさんが真っ先にはじめたのが、武術教室であった。カイサとのつながりもじつは、多文化交流会において飛び入りで披露したカンフーのパフォーマンスがきっかけであった。一九九七年設立した武術・カンフー協会は現在、多くの師範や会員をかかえる組織となり、常時開かれている武術種ごとのコースにも、何百人もの受講生が参加しているという。最近、毎年のように訓練生をつれ、中国を中心に外国での試合に臨むハメッドさんは三七歳とはいえ、師匠そのものだ。はじめて会ったとき小柄だがマッチョな雰囲気が漂っていたのはそのためだった。人権活動家としては、ややミスマッチなこの側面が彼の生きがいであるのは、公演や指導で各地をとびまわる姿からうかがえる。ひょっとすると、彼がフィンランドでもっとも知られているのは格闘家ハメッド・シャファエとしての顔かもしれない。

ホスト社会へ働きかけ

ハメッドさんのように第三の生き方をえらぶ外国人はフィンランドでも少なくはない。どの国であろうと難民というレッテルにとらわれず、自由に行動したいのは誰しものぞむところであろう。それでも多くの人は、さまざまな事情で外国人として目立つことを避け、またことばの問題や日常生活に埋没して消極的になりがちなのが現実である。ところがハメッドさんは自分を難民として受け入れたフィンランドに対しても、弱小国の犠牲の上に繁栄する「先進国」としての義務を全うしていない、少数派への差別は消えていない、と歯に衣を着せない。多少疎まれてもことばを発し、行動を起こすのは、誰にとっても住みやすい社会にしたいからだという。これは何ごとにも真剣な彼の態度にもあらわれているようで、その一貫した言動は、すがすがしさと意欲を感じさせてくれる。第三の生き方が社会や周囲にあたえてくれるのは、その内容以前にじつはこの前向きな意欲なのかも知れない。

中国少林寺での
モデル演技
（1999年）


イランでのアフガン難民キャンプで青年たちに武術を教える（1991年）


カイサでの文化
イベントに
集った少年たち
（2003年）

マレーシアでのジュニア
武術競技会に参加した
息子（右端）と（2006年）

ヘルシンキの自宅で息子の誕生日を祝う（2005年）